

# 近代地域文化としての“バテンレース”

—頸城野を織りなす—

石塚正英\*

## "Baten-race" as a modern regional culture in Kubikino

ISHIZUKA Masahide\*

キーワード：バテンレース、地域文化、伝統工芸、NPO

### 1. 町家でバテンレースの伝統継承

徳川家康の6男、松平忠輝が1614年に開いた高田藩、その城下町の一角「大鋸町（おがまち）」、現在の上越市仲町6丁目に、築150年の町家「大鋸町ますや」が佇んでおります。この古民家を事務所とするNPO法人頸城野郷土資料室（2008年4月創立、石塚正英理事長、KFA）では、数年前から地元工芸品バテンレースの手編み講習会（ワークショップ）を行っています。受講生募集にあたって、次の案内チラシを作りました。

「昔はどの家にも一枚や二枚置いてあったバテンレース、今では目にすることは稀な状況にあります。しかしながら明治30年代より地場産業として大いに栄えた技術は絶えることなく連綿と今に伝えられてきているのです。日本のバテンレースのふるさとともいわれる越後高田で、このような伝統的技術をもっと多くの方に知ってもらい、また広がっていくことを目的とし、このたびNPO法人頸城野郷土資料室主催の『くびき野カレッジ天地びと』特別講座として、ワークショップを開催することとなりました。この機会に、身近にあったバテンレースを思い出して作ってみませんか？

布テープで曲線模様を作り、その間を糸でかがって埋めていく技法です。一通りの技法を身に付けて、

自分でデザインすれば、洋服の胸元やバッグに付けたりアクセサリーにしたりと応用範囲も広がり、オリジナルで自由に楽しむことができます。」

第1期は2011年9月に開講しました。以後3年間連続して開講しました。その後は、姉妹団体NPO法人街なみFocus（2010年9月創立、高野恒男理事長、石塚正英担当）に引き継がれて今日に至っております。

講習開始から今日まで、参加者のみなさんは実に楽しくワークショップを受けられました。なかでも、抜群の技能習得を果たした相澤満千代さんは、ついに2013年の春、バテンレースの伝統を維持してきた有沢製作所より「認定書」を授与され、「有沢バテンレース認定講師」となられました。関係者一同、とてもうれしく思っております。

ところで、講習会場に使用しました「大鋸町ますや」は、慶應4年から明治元年にかけて建造された古民家で、2018年で築150年となります。この家は野口善吉（1842～1915）が建てたと思われま。高田藩時代から野口家は家督相続とともに代々「善吉」を襲名しました。野口家は材木商を営みつつ大鋸町の大工職人の組合（太子講）結成に尽力しました。

同時にまた、自由民権志士の活動を経済的に支援した模様です。菩提寺である本覚寺（上越市本町7）の檀家総代をつとめ、墓地は現在も遺族子孫によつ

\*理工学部情報システムデザイン学系教授 Professor, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

て手厚く弔われておりますが、その野口家が建てた町家において、いまはバテンレースの技術継承が地道に行われているのです。この町家では、毎年 2 月になると警女さんの門付けが行われます（主催・高田警女の文化を保存・発信する会）。高田開府四百年以後にふさわしい雰囲気醸成を醸しています。

## 2. 手工芸品バテンレースの発祥

上越市史専門委員会現代史部会編集『バテンレースと細幅織物』上越市発行、2007 年、11～12 頁）には、以下のように記されています。

「バテンレースは、アメリカ人のサラ・ハドレー（サラ・ハーディー）女史によって考案されたレースである。彼女は、婦人雑誌の手芸部門の編集を担当していたが、明治 25（1893）年にニューヨークで開催された第 1 回ワールドフェアに、テーブルレースの手法を使ったテーブルクロスセットを出品した（従って、テーブルレース自体はそれ以前から、19 世紀後半にはすでに作られていたことを意味している）。そこで、バテンベルク家（貴族名）やその他の貴族から作品が認められ、注文がくることを期待したのであった。そして、その作品はコンテストで 1 位に入賞したが、残念ながらバテンベルク家からの注文は何もこなかったのである。がっかりしたハドレー女史は、次のシリーズのテーブルレースに繊細なピコット（小さな突起）やループ（小さな輪）を入れて、それらの先品を『バテンベルク家御用達』とした。そして、このレースが後に『ロイヤル・バテンレース』として世に知られるようになったのである。」（上越市史専門委員会現代史部会編集『バテンレースと細幅織物』上越市発行、2007 年、11～12 頁）

引用文中、「明治 25（1893）年にニューヨークで開催された第 1 回ワールドフェア」にはいくつかの疑問が残ります。第一、1893 年は正しいとして、その年は明治 26 年です。また、1893 年の「ワールドフェア（World's Fair）」を世界博覧会（万国博覧会）と理解すると、それは日本も参加したもので、シカゴで開催されています。同年にニューヨークでも似たような名称の博覧会が開催されたのでしょうか。

そのような疑問はさておき、『バテンレースと細幅織物』によると、バテンレースの先駆的工芸テーブルレース品はルネッサンス期のイタリアに、そしてフランドル地方に登場しています。以後、17 世紀後半からフランスおよびイギリスに伝播しました。18 世紀後半から始まる産業革命の影響下で、レース編みも機械化が進みました。そしてレース用編み機は改良が加えられ、19 世紀末のアメリカで上記のような事情から、テーブルレースの一つに「バテンレース」の名が冠せられるようになったというわけです。なお、テーブルレースとは、リボン状の細幅テープ（ブレード）を型紙に沿って台紙に糸で留めてテープ同士を縫い付け、テープの隙間を針でつなげるように埋めて作りあげるレース編みです。

## 3. 越後高田での生産拡大

『バテンレースと細幅織物』には、以下のように記されています。

「時期は前後してあまり明確ではないが、明治 20 年代の始め頃に、アメリカ系の J・R・サイモン商會が、横浜とその周辺地域の婦人達にレースの作り方を教え、品質の良いものをアメリカ本国へ輸出したのが、日本でのバテンレース生産の始まりと言ってよい。」（22 頁）

「新潟県上越地方でのバテンレース生産は、『明治 31（1898）年 2 月に、横浜の飯島商會の飯島保太郎が、以前から高田でハンカチを生産していた木戸信次郎を主任として、高田の職人町（現・大町通り）に支店を設けたのが最初である。横浜から西沢タツ・阿部ウメの女史 2 名を指導講師に招いて、募集した工女たちに作り方の技術指導をして生産を始めた』と幾つかの文献に記載されている。」（26 頁）

以上の引用から推察するに、明治中期の前後、高田と横浜の経済交流は盛んだったようです。その傾向は、経済活動に促されて、社会文化の諸領域に及びました。例えば、松代藩の家老だった鹿野浪衛（1843～1915）は、佐久間象山の勧めで文明開化を象徴する写真師になるべく、明治維新後、横浜（横山松三郎に師事）で修業をしました。客の多くは外国人でした。その後、横浜と同じ開港市の新潟に向かう途上、明治 6 年、長野（現長野市権堂）に 1

年だけ滞在して写真師の仕事をします。翌年、高田に移動するのですが、結果的にこの地に留まることになるのです。

こうして「鹿野写真館」（上越市寺町 2）は現在に至るのですが、明治 40 年ころからバテンレース業界も写真業界も、にわかに活気を呈し始めます。その背景は軍隊の駐留です。明治 41 年、高田に第十三師団が設置されると、市内では軍隊特有の行事や商売が繁盛するようになりました。朝市が設営され、将校集会所の偕行社がつくられました。とくに朝市は戦中・戦後においていっそうの繁盛期を迎え、以下のような状況が生まれたのです。

「戦後の高度成長期以前まで、市が開かれる市日にはバテン業者の玄関先には女の人達の列ができたとのことである。その意味では、当時も、周辺農村部の農家にとってバテンレースは貴重な現金収入の道であったのである。

また、バテンが軍人家庭の手頃な内職として流行し、そのために生産額が上昇したという面もあった。」（35～36 頁）

問屋制家内工業を主形態とするバテンレース業界は、ほかの産業と同様、明治大正昭和前期の景気変動（戦争景気・昭和恐慌など）にさらされました。バテンは奢侈品でしたから、戦争末期には生産中止を余儀なくされました。けれども、戦後に至り、飯島商店（高田）、飯塚商店（直江津）が営業を再開し、戦前からブレードを生産していた有沢製作所もバテンレースに参入して高田の大町に工場を設置して操業を開始しました。

#### 4. 地域産業から文化活動への重点移動

さて、1960 年代の高度成長期を経過するにつれ、海外輸出額は 1950 年代後半をピークに隆盛を極めました。けれども、1970 年代前半のドル・ショックを境に輸出は激減します。

生産自体はその後しばらく国内需要の伸びに支えられましたが、1980 年代末、つまり昭和の終わり頃には衰退の速度を速めたのです。家内工業の大黒柱である内職労働者が高齢化し、後継者を育てることも困難となっていきました。

そのようにして、バテンレースはもはや産業とし

ては成り立たなくなっていくのですが、2000 年代に入ると、いわゆる特定非営利活動法人（NPO）活動の一環として、バテンレースが地域文化や伝統工芸の目玉になりはじめました。地域文化や郷土歴史の再発見という傾向は、1988-89 年に政府の音頭で地方自治体が実施した「ふるさと創生事業」に起点を置くこともできますが、本格化するのは 1998 年末に NPO 促進法が施行された後となります。上越市域では、バテンレースを地場産業振興でなく、越後高田の伝統文化とみなして、地域住民による郷土文化の見直し・再生と規定することとなったのです。

おりしも上越市では、1997 年から 2000 年にかけて、上越地域独特の伝統技術を持つ卓越した技術者 39 名を「上越マイスター」として認定しました。そして、同マイスターの技術を保存、伝承し、広く紹介するため、デジタル映像化した「上越マイスターデジタルアーカイブ」を web 上に掲載しました。それを見ますと、バテンレース職人の一人として、近藤紀一郎氏が紹介されています。NPO 法人頸城野郷土資料室（KFA）は、2008 年に近藤氏と面会し、以下のようにして NPO 的バテンレース振興の企画を立案しました。

まずは、近藤氏に KFA の文化講座「くびき野カレッジ天地びと」で説明講座「高田のバテンレース」を担当して戴きました（2011 年 6 月 11 日）。その後、概略以下の企画書を作成しました。

バテンレース講座（ワークショップ）企画書

提案日 2011 年 6 月 14 日

提案者 谷 眞知子

背景 先日のくびき野カレッジで講演された近藤紀一郎氏のお話にあったように、バテンレースは私たちの町 高田で一時期地場産業として栄えながらも現在は衰退し、その技術は全国に散らばった近藤さんの教え子により細々と、しかし連綿と今に伝えられてきています。日本のバテンレースの故郷でありながら、地元には技術者もわずか数えるほどであり、いつ途絶えてもおかしくない状況であるのに加え、後継者を育てていく十分な環境は整っていない。

目的 昔ほどの家にも一枚や二枚置いてあったバテンレースも 今では見ることも稀な状況であ

り、まずは多くの人にバテンレースを思い出し、または知ってもらうこと、また実際に技術を習い実践してみることによる技術習得意欲の促進、さらに技術習得者の拡大に繋がることを期待し、バテンレースの復興を目指す第一歩とする。

概要 くびき野カレッジの座学とは別枠の実践型ワークショップとして、仲六の町家「ますや」に於いて土曜日午前中 2 時間の設定×8 回(16 時間・2 ヶ月)で一通りの技術の習得が目安。希望者があれば初級講座のくりかえし、上級講座への継続等の発展的展開も考慮。

実施体制・予算 技術講師は、近藤さんのほか近隣の教え子さんに協力を要請中。講師料、受講料などは状況をみながら検討する。補助金の有無等を調査する。告知・PR が重要。広くメディアを活用。広報じょうえつ、上越タイムス、上越よみうり、新潟日報ほか。

## 5. 実践報告—NPO 活動の一環として

最後に、実際のワークショップを、写真を通じて事例報告することにします。最初の写真は 2011 年 8 月 13 日に大鋸町ますやで行われたプレ・ワークショップです。中央の男性が近藤氏です。取材に訪れた新潟日報記者(左端)も興味がわき、途中参加しました。



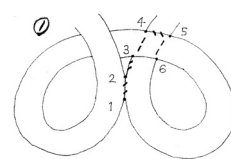
次の写真は 2017 年 7 月 23 日に町家交流館「高田小町」で行われた街なみ Focus 主催のワークショップです。講師(写真の右奥で指導する女性)は、近藤氏の指導を得て熟練の域に達しているバテ

ン職人、熊田貞子先生(80 歳代)です。



次の写真は、ワークショップの指導用に大きく描いてボードに張り付けたバテン型紙の一つ、および完成品です。

まずは受講生の心身の充実を第 1 の目標に以上の実践を繰り返しています。あわせて、バテンレー



ス文化再生の第一歩として、高齢に達してはいるものの矍鑠たる技術保持者の方々にじきじきの指導を仰ぎつつ若い後継技術者の育成に努めております。そのような経過をたどりながら、NPO 法人頸城野郷土資料室(KFA)本来の目標であります「地域における人の地産地消」を実現することを第 3 の目標としているのです。